

【中学生の部】 作文部門 未来賞

「あと9年のタイムリミット」

岡山大学附属中学校 1年 おおむら ききほ 大村 咲歩

「温室効果ガス実質ゼロ」という目標に向けて日本は2030年までに46%、理想は50%の温室効果ガスを削減することを宣言した。地球の未来を背負う勝負の年、2030年まであと9年。刻々と経過していく時間をより有効に活用するためには、全て大人まかせにするのではなく、私たちのような子どもも地球人の一員として行動していくことが重要だと私は考える。あと9年のタイムリミットの中で、私たちはどのように行動していくべきなのだろうか。また私たちが創っていくべき未来とはどのようなものなのだろう。

まず考えるべきなのは今の日本や世界の現実である。年間の日本の二酸化炭素の排出量は世界第5位。1位は中華人民共和国の約957億トン、2位はアメリカ合衆国、3位はインド、4位はロシアという順位が2018年の外務省のデータに示してある。全体を見てみると、上位のほとんどの国が先進国であり、発展途上国の多くが下位である。その要因の一つに自動車の普及が挙げられる。発展途上国は先進国に比べて自動車の普及率がとても低い。だからその分二酸化炭素をはじめとする温室効果ガスの排出量も低くなっている、ということである。しかし、だからといてもしも世界から自動車をなくしたらどうなるか。二酸化炭素などの温室効果ガスの排出量はおそらく格段に減るが、対照的に交通手段が限られ、人々は非常に不便な生活を送ることになったり、自動車関係の職に就いていた人たちが失業し、社会全体の金銭状況が悪化したりすることが見込まれる。したがって、単純に自動車などの温室効果ガスを排出するものを減らしたり、無くしたりしたとしても、地球温暖化は解決するかもしれないが一方、それが原因で社会情勢が不安定になるリスクを背負うこともあるのが分かる。

気候変動問題を解決するには、まず第一に社会情勢が安定しており、みんなが安心して暮らせる社会の中でお互いに協力し合ったり助け合ったりできる環境が必要なのだ。

今の世界で、その環境が保障されているか、と考えると必ずしもそうでないことが分かる。そんな中で気候変動問題を解決するのは非常に困難なことだと思う。

では私たちがお互いに協力し合ったり助け合ったりできる環境をつくるためにはどうすれば良いのだろうか。私は、子どもの持っている力を活用すれば良いのではないかと考えている。子どもの持っている力とは、想像力と自分の間違いを認められる力などのことだ。想像力を働かせ、相手の気持ちを考えたり、人と意見を交わし合う中で発見した自分の間違いを認め、良い方向に軌道修正したりすることで、お互いを尊重し合える環境をつくっていけると思う。大人は、子どもの生活面や学習面のサポート、また仕事をして社会そのものを動かしていくことが必要だ。

つまり、大人は社会そのもの、いわば社会の外側を動かしていき、子どもは社会の内側を豊かにしていくという役割分担をするのがお互いに協力し合ったり助け合ったりできる環境をつくるために

大切だということだ。

地球温暖化を防いで、みんなが協力し合え、助け合える社会をつくっていくのではなく、みんなが協力し合え、助け合える社会をつくることで、地球温暖化を防いでいけるようにすることが重要だと私は思う。

初めに私が提示した、「私たちはどのように行動していくべきなのか、また私たちが創っていくべき未来とはどのようなものなのだろう」という問題に対する私自身の答えは「私たちは社会情勢が安定しており、みんなが安心して暮らせる社会の中でお互いに協力し合ったり助け合ったりできる未来を創っていくべき。そして、それを達成するために、大人と子どものそれぞれの持っている力をお互いが理解し、大人と子どもが役割分担をして一緒に社会を運営していくというように行動していくことが大切だ。それが達成でき、地球温暖化を解決するための土台ができたなら、次は本格的に日本全体で団結して地球温暖化解決のために行動していくなどといった、段階をふんでいくと良いと思う。タイムリミットはあと9年。効率的に行動し、少しでもはやく「温室効果ガス実質ゼロ」という目標を達成するため、できるだけ多くの人に地球温暖化について知ってもらうことから始めていくのが一番の近道だと思う。

新型コロナウイルスが猛威をふるっている今は、普段より大人と子どもが役割分担をしながら、かつ協力し合ったり助け合ったりしていくことが、地球温暖化解決以外の目的でも求められていると考えられる。そのような状況下だからこそ、良い緊張感や良い危機感を持って適切に行動し、地球温暖化を始めとする気候変動問題解決のための始めの第一歩を踏み出せるといいなと思っている。